

Le Goût du Café au lait

(カフェ・オ・レの味)

小林 真理子

パリに生きる大先輩・マロニエの会員でもある三嶋愛子さんの仏語による第二作目の小説です。

一月初旬にメールにて新刊のご案内を頂き、即、購入して読みました。総絞りのあざやかな桃色の振袖の少女の後ろ姿が表紙です。後ろ姿に既に心惹かれるものがあります。ふんだんな豊かな語彙(ごい)には辞書が必要



でしたが、すらすらと水を含む海綿のように私の内に入ってきます。半世紀以上をパリに生きた日本女性の自伝的な小説であり、年代は違っても初めて憧れのフランス、パリに到着した胸いっぱいの感動が、私にも同じものだったからです。初期の留学生時代から現在の心の在り様を描いており、29章(130頁)により様々な思い出を語っています。

パリに到着してタクシーの窓から眺める次から次へと移り行くこの目で実際に見る古いエレガントな高さの等しく整っている建物群。レース編みのような鋼鉄の黒いバルコニーの美しさに目を見張る。日本で学んだフランス文学、スタンダール、バルザック、モーパッサンの描くパリ、そして地方... 自分もいつか旅しよう! 広大なノルマンディの大地、ブルターニュの海風を胸一杯吸うだろう、そして今は何よりもパリ!

ソルボンヌの試験官はシックな装いの中年女性。「あなたは人生に於いて何をなしたいのですか?」日本ではそんな直截(ちよくせつ)的な事は質問しないものだった。驚きと同時に気持ちよく感じ、そして憧れる。こんな自信にあふれた女性にどれだけの時間を費やしたら自分は近づけるのだろうと。クラス内では戦勝国の賛美にふるまうアメリカの留学生達が質問する。「どうしてフランスの人は私達をバカにするような感じなのですか?」それに対し教師は微笑みつつ「多分、アメ

リカ人が持つナイーブさ(単純、無邪気、鈍感の意もある)からではないでしょうか?」何て巧みな答えのかわし方だろう! と感心し「大人」を学ぶ主人公。

フランス文学「パルムの僧院」を原書で読んでいても、子供にも当たり前のコトバがわからない。牛のオス・メス、犬のオトナ・コドモ、絵本から学びなおす。フランス語って大変! 大学都市(シテ・ユニベルシテール、マロニエの新年会や会合などで今も現役)では日の丸をつけたスクーターの日本青年に会う。当時既にブザンソン指揮者コンクールで一位受賞していた若き小澤征爾、渡航資金を援助してくれたスポンサーの富士重工の注文? を得、日の丸のスクーターで走りまわり日本の宣伝に一役買うという条件で1959年貨物船で単身渡仏。主人公が出会った時には「フランスは保守的なオトナの国」とアメリカに移るという頃。今までの日本人留学生には無い気持ちの良い明るい笑顔で話す彼は風のように現れ風のように消えてしまった。その後小澤は1960年ボストンのパークシャー音楽祭やカラヤンコンクールで1位。シャルル・ミュンシュ、バーンスタイン、カラヤンに指導を受けて世界のオザワに成るのです。

リセを退職して外国人留学生の世話をする親切で快活なフランス人未亡人と出会い、フランスの生き方を優しく案内してもらいます。のみの市などを一緒に散策しつつモノを吟味して古い良いモノを選ぶこと。フランスではこうよ、ああよ、とその生活のスタイルを教えてくれた。車の免許は持っているの? と中古の2CV(シトロエン)をプレゼントさえしてくれる。それを修理しパリから遠い場所の冒険を始めます。何たるエネルギー、積極性でしょう。南仏を旅行した時はミストラル(南の地方台風)に出会って往生したり、少しづつこの国の持つ深さに目覚めてゆきます。1968年の5月事件の際の怖ろしさ70年代には豊かになった日本人の姿がパリで多く見られるようになり、80年代の中東問題によるテロ事件、80年代後半のバブル期には高価なブランド店に列する若い日本女性たちに目を見張る。そして時は移



り、世界的不況。パリの街も小さな個人の店は閉ざされて、鼻にかかるフランス語(アフリカ系移民)を多く聴くようになる現代、フッと見上げれば彼女が初めて来た頃からずっと活動している女優のロベール・オッセン(90歳)の舞台がかかっている。古き友人知人は逝き、しかし彼女は残っている。人生は河の流れのようだ。私の人生はまだ続く、明日も晴れるだろう、と終わっています。今はタレントなど2-3年パリ生活をした人がインターネットのブログをしたり本にしたりしていますが、それはそれで昨今の若い感覚のパリで面白いけれど、その間(はざま)にいる私には三嶋さんのようなパリの大先輩の語る様々に、懐かしさと同時に今後の自分自身のことも含めて大いに考えさせられた豊かな読後感でした。

